

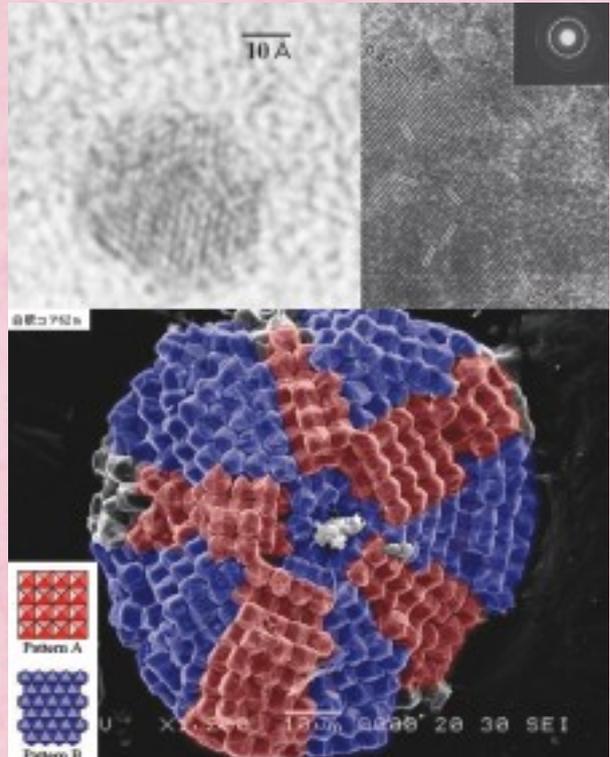
# 理学部は今

題字 増田芳男理学部長

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>



野生メダカの雄(上)と雌。雄の背鰭と尻鰭は雌に比べて大きい。(P. 2に解説記事)



隕石中のナノダイヤモンド(左上)、F P 20面体構造(下)、ナノ「ゲート石」(右上) (P. 3に解説記事)

## 目次

メダカの雄を決定する遺伝子.....	2	新任教職員の紹介	
日本鉱物学会賞を受賞して.....	3	物理学科	山田 裕..... 6
卒業生からの言葉.....	4	退官教職員の挨拶	
学科ニュース		数学科	明石 重男..... 7
数 学 科.....	5	物理学科	宮野 和政..... 7
物 理 学 科.....	5	化学科	小俣 三郎..... 7
化 学 科.....	5	事務長	川島 武義..... 7
生 物 学 科.....	5	旭町展示館.....	8
地 質 学 科.....	6	新潟駅南キャンパスオープン.....	8
自然環境科学科.....	6	インターンシップの実状.....	8
附属臨海実験所ニュース.....	6	これからの行事予定.....	8
		編集後記.....	8

# メダカの雄を決定する遺伝子

自然環境科学科 酒泉 満、濱口 哲

小学校5年生の理科の教科書を見ると、1学期に習う項目として、「メダカの雄と雌の違い」がある。どうやら生物の生殖、発生、成長を観察することによって生命の連続性と性、生態系の意味を学ぶのが目的のようである。その記述の中に必ず出てくるのが「雌と雄はどこで見分けるのだろうか」という問いかけと背鰭と尻鰭の形の違い（表紙）を説明する図である。

脊椎動物の外見上の性差は、ヒトを含めて性ホルモンの制御下にあることが知られている。すなわち、精巣あるいは卵巣から分泌される性ホルモンが「雄らしさ」と「雌らしさ」を作っていることになる。つまり外見上の性差のものは生殖巣の性差ということである。

背骨をもつ動物（脊椎動物）の生殖腺の性差をつかさどる原因遺伝子として唯一知られているのがSRYであった。この遺伝子は哺乳類のY染色体上にあり、生殖巣の性がまだ決まっていない時期に情報発現されることにより、XY個体の未分化な生殖巣を精巣の方向へ誘導する。一方、XX個体では、この遺伝子がないために卵巣方向へ分化が進むと考えられている。

それではメダカの雄や雌はどのようにしてできてくるのだろうか？ メダカも脊椎動物の一員であるからその性差のものは生殖巣の雌雄差にある。ところが、「SRYと相同な遺伝子がメダカの性を決定しているわけではないらしい」ことがメダカの性決定遺伝子探しの当初から予想されていた。一体どんな遺伝子がこの小魚の性を決めているのか？

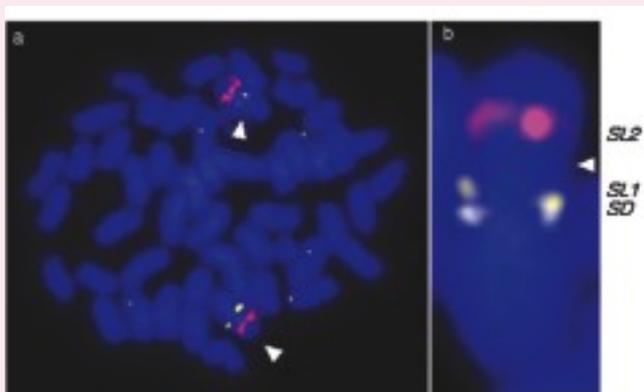


図1. a. メダカの染色体。メダカは24対の染色体をもつ。そのうちの1対（矢尻）が性染色体である。  
b. 性染色体の拡大図。性決定領域(SD; 白色の部分)に雄を決定する遺伝子DMYがある。矢尻は動原体領域、赤色の部分は短腕上のDNAマーカーSL2、黄色は長腕上のマーカーSL1。DMYはSL1から動原体と反対方向へ「歩く」ことによって発見された。

私たちは最近、メダカの雄の性を作ると思われる新しい遺伝子DMYを発見した。脊椎動物で2番目の「性決定遺伝子」の発見である。それはメダカのY染色体上にあり、脊椎動物の精巣の発達に密接に関連すると考えられている既知の遺伝子DMRT1とよく似ていた。性には雄と雌しかなく、それは生物界においてかなり普遍的にみえる。しかし雄と雌を作る仕組みはかなり多様なようである。この新規の遺伝子が、どのようにして既存の遺伝子から進化してきたのか、どのようにして雄の体を作るのか、どうしてこの遺伝子がないと雌になるのか、が私たちの目下の興味である。

メダカは日本在来の生物であり、近年脊椎動物のモデル実験動物として活躍の場が広がっている。棲息地域に住む私たちにはこの生物種を使って研究する上でたくさんの強みがある。実際、この研究においても、「DMYが雄の性を作るのに必須の遺伝子である」という最終的な証明は野生メダカから発見された突然変異体によるものであった。本研究が日本産野生メダカの特長を生かし、自然科学研究科の修了生と多くの大学院生、理学部学生との共同で遂行されたことが私たちの自慢である。

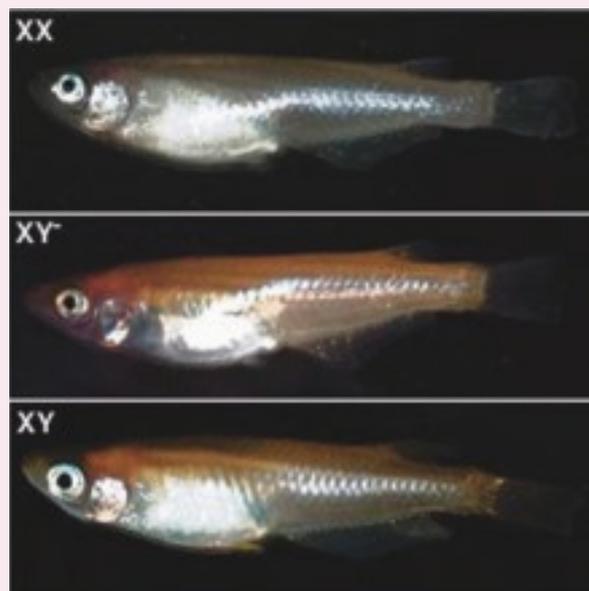


図2. 雄決定遺伝子を失ったXYメダカ（中段）

メダカ体色は性染色体上の遺伝子(R/r)によって決定される。上段(XX)は正常なXX雌で体色は白い(rr)。下段(XY)は正常なXY雄でオレンジ色をしている(Rr)。中段のメダカ(XY-)はY染色体上の性決定遺伝子DMYを欠いているため体色はXY雄と同様オレンジ色だが雌の形態を示している。

# 日本鉱物学会賞を受賞して

地質科学科 赤井 純治

この度日本鉱物学会の2002年度日本鉱物学会賞を頂きました。大変光栄に思います。

受賞対象の研究は、高分解能電子顕微鏡による造岩鉱物のマイクロ構造・組織の研究です。鉱物が、原子の規則的に並んだ結晶構造をもつ事がわかったのは、ラウエのX線回折実験の行われた1912年でした。そして理想的規則的な結晶というイメージが生まれました。ところが、その規則的な結晶が凡そ解析されてしまうと、こんどはその中にみられる不規則性といった事に関心が向かいました。結晶成長にかかわる転位、表面構造、微細組織などで重要な意味をもっていました。さらに厳密な平均的構造が求められたり、又不規則構造などはX線的に推定はできるものの、隔靴搔痒、直接に局所的な構造をみることはできませんでした。ここに現れたのが高分解能電子顕微鏡（電顕）法で、1970年代初頭です。構造まで解像できる分解能の向上、試料作成法開拓、局所を直接観察できるという強みをもった事によりました。この方法の鉱物学への導入により、鉱物の見方は一歩前進する事になりました。

私が、研究をはじめたのが、ちょうどこの時期に遭遇し、当時日本では鉱物学のなかに高分解能電顕法を使おうという雰囲気も全くなかった当時、若気の至り（血気）もあり、見通しはあまりありませんでしたが、その課題に挑戦しました。それは偶然なことがきっかけで、高分解能電顕のすばらしい成果があがっている事を知り、鉱物を見るのに使ったらすごいことになるのではという事で、毎日宇治にある化学研究所に通い、教を乞い、いわば弟子入りをして修業をしました。正式にその研究室に入ったわけではなく、外の人間でしたから、頭を下げお願いの日々で、またそこにいた方には大変お世話になりました。結局高分解能法の最初の適用の論文は、Buseck & Iijima グループに一歩先をこされ、1974年 American Mineralogist に彼らの鉱物構造の高分解能写真が彗星のごとく現れ、鉱物学界に衝撃を与えました。その時の一歩先をこされた悔しさが今も思い出されます。しかし、すでに私も技術的にはほぼ近いところまで進めていましたから、その後様々な対象に電顕法を適用できました。最初は、少し古い機械のJEM 7型機を使い、丸1週間かけ、5万倍で撮影したフィルムを現像してみても18Åのひずみを反映した矢がすり模様のGPゾーン



図1

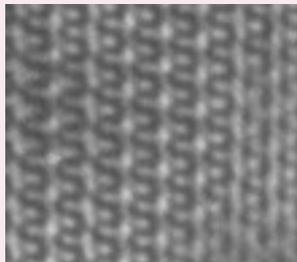


図2

格子像があらわれた時の感激(図1)、混合層粘土鉱物が地層のずれた重なりのように見た時の興味。世界的な鉱物学者伊藤貞一先生の双晶空間群論で有名な珪灰石中の積層不整の世界で最初の直接観察(図2)、角閃石構造中に Chisholm's defects を最初に実際に見いだしたこと、バイオバ

イリボール鉱物群の系統的な解析、新潟県赤谷と京都大江山産 Ca 系の三重鎖鉱物の最初の発見、私の先生である富田克敏先生が提起した酸化角閃石モデルを証明できた事も嬉しい観察結果でした(学報677、参照)。先輩の山口佳昭さんが『科学には発見と発明しかない』と言っています。大小の新たな発見の連続、これが私の研究人生だったかとも思います。

ナノからミクロの局所構造の直接観察が可能になり、私一人でなく多くの人の研究の結果ですが、ナノ～ミクロの鉱物像・階層性(図3)が示され、新たな鉱物観を構築しえたと思います。その後も電顕法で、鉱物学の新しい方向(隕石研究への適用、生物-鉱物相互作用とバイオミネラル、天然ナノ鉱物群の解析

(表紙写真参照)を幾つか切りひらいてこれたのではと考えています。私のやってきた事は電顕による鉱物解剖学でもありますが、27年間新潟大学理学部で自由に好きな研究をさせてもらえた事、理学部の多くの先生方に支援いただき、毎年個性ある学生さんと一緒に楽しく過ごせた研究生生活に、大変感謝しています。



図3

表紙写真説明：ここに示しているのは、我が研究室での最新映像、発見群の成果です。右上が隕石中のナノダイヤモンド(Aoki & Akai, in prep.)、左が新潟白根のポーリング試料中の二十面体フランボイダルパイライト(FP: Ohfuji & Akai, 2002)、下が生物関与でできたナノ「ゲーテ」石(goethite: ゲーサイト: Akai et al., 1999)である。(これらの発見は、夫々隕石の成因、堆積物の続成変化、生物-鉱物相互作用にとって重要な意味をもっている)。ゲーテは、実は鉱物学者でもあった。

### ■卒業に寄せて 扇 明子 (数学科)



改修工事が完了する前に理学部を去るのは残念ですが、この春、無事卒業単位を取得することができました。例えば2年次から、試験が8月2月と一年で最も過酷な時期になり、講義の難しさ以上に試験勉強が辛かったことも、今となっては忍耐力をつけるよい訓練になったと思います。専攻に関しては、理解を深められる恵まれた環境にありながら、探求する努力をしなかったことが悔やまれます。アルバイトでお金は得られましたが、知識は一生変わらない財産であると思いました。しかし出身や国籍の違う多くの友人達、各分野で活躍されている先生方との出会いという財産を得ることを出来ました。

### ■卒業の言葉 長谷部裕子 (物理学科)



卒業の言葉を書く場合、普通は「とっても充実した4年間だった」などと書くべきなのだろう。確かに、総合的に見ればそうだった。しかしまだ何かやり残しているようなことがある気がする。それが何なのかは自分でもよく分からない。

話は変わるが、私の大学の友達に、自分には到底まねできないようなリスクなことを平気でやってしまう人がいた。私はそんな彼女をうらやましく思っていた。危ないことがしてみたいというわけではない。ただ何らかのリスクを背負ってでも自分のやりたいことをやり通す、その精神に憧れた。いつも安全な所を通ってきた私だけけど、いつか「あの長谷部さんが!」と言われるような大きなことをしてみたい!

### ■卒業にあたって 菅谷 英昭 (化学科)



大学生となって早4年。気がつくと卒業する年になっていました。サークルに入ったり、友人と徹夜で飲み明かしたり、ワールドカップに行ったりと…さまざまな経験をしました。いろいろやった学生生活でしたが、僕はこの生活の中で良くも悪くも“自由”というものを学ぶことができました。これまでと違い、いつ何をするのも自由。自分の考えひとつで何でもできる。その代わりに自分の行動にこれまで以上に明確に“責任”というものがついてくる…さまざまな体験の中で自由の良さ、そして怖さを肌で体験できたように思います。この学生時代限定の貴重な体験を今後の人生に活かしていきたいと思います。徹夜飲みはやめられそうにないけど…

### ■卒業にあたって 荒木 愛 (生物学科)



無事に卒業を迎えることができたのも、周囲の人のおかげである。一年の春先、先生が「大学はやる気が全てである。」とおっしゃられていたことがとても印象に残っている。「勉強をしたいのなら、一年生でも研究室に配属してくれと自分から言えば、先生はあなたの机を用意してくれます。大学はそういうところですよ。」自分から動いた結果、現在は理学部生物学科に在籍している。しかし、転学部を期に、勉強の仕方からレポートの書き方まで全てが変わってしまい、苦勞することもたくさんあった。今までとは違った環境のなかでも無事にやってこられたのは、数多くの友人達に励まされ、この言葉に励まされたからである。

### ■「旅立ちし日」 石原 祐 (地質科学科)



腸閉塞に始まり、インフルエンザに終わる。

気が付けば過ぎし4年間は短く、されど振り返ると意味があり充実というもの存分に与えてくれていた。

このような大学生活をあの理想像できたであろうか? 他の人には決して味わうことのできない異空間であり、理解も決してできないであろう。そう、根本的に違うのだ!

だがそれが、そうその体験がその時間がその空間が自分だけに存在し、また自分自身であることを心で感じられる。この4年間の経験と共に私は社会へと旅立つことが出来る。共に旅立つ学友達に捧ぐ。

去りし刻 友と学びし わが道を  
はばたく未来(あす)へ 翼広げん

### ■四年間を振り返って 田名網裕一 (自然環境科学科)



新潟大学に入学して四年。あっという間のことだった。自然環境科学科という名前にひかれ、ここで環境問題を学びたいという思いを抱いていた日のことが懐かしく感じる。入学当初、環境問題を学ぶという私の思いと学科のコンセプトの違いを感じ、自分の学びたいことが学べるか不安になることもあったが、大学は学ぼうとすればいくらでも学べる場所。この四年間は知識を詰め込んだというより学び方を知った四年間であったと思う。学部卒業後、私は新潟大学の大学院、自然科学研究科に進学する。学ぼうという意志と時間がともにあるというのはなかなかないと思う。その貴重な時間を無駄にしないよう、頑張りたい。

## 学科ニュース

### 数学科

高校までと比べ大学の教科履修は選択の自由度が高く、また新潟大では高校までと異なりクラスという概念がないことが特徴です。このことは、様々な分野を勉強できるという意味で有益ですが、自由が大きすぎもてあましてしまう人もいます。また、友人関係が作りにくいという人も出てきます。このような状況を踏まえ、数学科で最近6年間行っている新入生研修合宿を紹介します。この研修は、数学科に入ってきた新入生の皆さんが早く大学生活に慣れ、スムーズに学習を開始できること、親睦を深めることができる事などを目的に、入学時の土日に行われています。よく使われている場所は、巻の青少年研修センターです。内容は少しずつ毎年異なりますが、新入生の大学での履修相談、数名の教員による模擬講義、野外炊事や若干の運動、懇親会などからなっています。数学科教員から4名から5名程度参加しています。また実施にあたり理学部後援会から一部補助を頂いております。

### 物理学科

平成15年3月に物理学科卒業予定者は43人です。そのうち60%は他大学を含めて大学院進学、15%は就職、残りの何人かは公務員及び教員の再トライ組です。3つの専攻に分散している物理系大学院前期課程(修士)組は25人の修了者を見まして、数人が後期課程に進学する以外は全員社会に巣立ちます。

宮野和政教授の最終講義が2月14日に卒業生を含む多数の聴衆を前におこなわれました。40年余にわたる長かった宮野氏の足跡が1時間のパワーポイントショーにまとめられ、感慨深いものがありました。

大学院自然科学研究科専任教員の草部浩一助教授も本年3月をもって新潟大学を去られて、4月からは大阪大学大学院基礎工学研究科物質創成専攻の助教授に着任されます。

写真はA. アプリコゾフ博士(アルゴンヌ国立研究所)です。物性理論の学生の必読書であった「場の量子論の方法」の著者です。コインブラ(ポルトガル)で開かれた理論物理学のワークショップで会ったときのものです。



### 化学科

自然科学研究科の新棟は2期に分け工事をしていましたが、10月に全体が完成し、この新しい建物に5名の化学科教員の研究室が移動しました。さらに、物質基礎科学実験

室という化学科にとって重要な部屋がこの物質生産棟の2階にできました。化学科と自然環境科学科の学生が、化学系の実験を行うために設



けられたものです。冷暖房と空調換気システムを備え、夏冬を問わず快適な環境で実験に励むことができます。目に優しいパステルグリーンの実験台と、有害な試薬を安全に扱うためのドラフト実験台を壁一面に、十分な台数備えることができました。竣工直後より学生実験に利用されており、お昼過ぎから夜まで(時々夜中まで)実験に勤しむ姿を見ることができます。



様々な討論会で今年も学生が研究発表をしています。例えば、有機合成化学協会新潟シンポ(11/30、12/1)は有機分野教員の世話により新潟大学にて行われました。横浜市立大学で開かれた細胞核の動態に関する国際研究集会(Nuclear Dynamics、12/15)は堀米助教授が主催者の一人です。この生化学分野で教育研究に長年携わられてきた小俣教授が3月で退官されます。

### 生物学科

生物学科にとって一番大きな行事である課題研究発表会(写真)が2月18日に、修士論文発表会が2月14日に、博士論文発表会が2月21日にそれぞれ例年のとおり公開で行われました。今年は19名の4年生、12名の修士学生、3名の博士課程学生が研究発表を行い、それぞれ3年間、2年間、1年間の研究成果を堂々と発表し、活発な討論が行われました。4年生のうち12名は大学院修士課程に進学し、修士課程学生のうち3名は大学院博士課程に、他の学生は大学を卒業して社会に出て行きます。これからの諸君の発展と活躍を楽しみにしています。

この3月で長年生物学科で教鞭を執られた森和博教授、そして同様に長年にわたり事務を担当された長嶋純子事務官が停年退官されます。



## ■地質科学科

理学部校舎は今大改修中で、地質科学教室の皆も別々の棟に研究室をもち、実験室も狭く、分散状態です。学生・院生の皆さん、また特に卒論生、修論生等には多大なるご迷惑をおかけしました。このような中でみんなよく頑張っていて、今年も立派な卒論・修論・博士論文ができました。それらの発表会も全て無事終わりました。このような意味で彼らが仕上げたものについて、今年とはとりわけ価値があるとも思っています。

また、年末から年始にかけては、多くの先生方が海外へ地質調査に出かけていきました。宮下先生・高澤先生はオマーン、立石先生はベトナム、田澤先生はオーストラリア、志村先生はスリランカと、今や世界中がフィールドで、世界をまたにかけて活躍中です。4月には晴れて改修された建物に多くの教員が引越し、再度多くのスタッフが一同に会し、また実験室も新しくなります。新しい気持ちで、教室としてさらに力を合わせてやっていきたいと思えます。



## ■自然環境科学科

**【課題研究発表】** 4年生の課題研究（卒業研究）の発表会は例年2日間にわたって開催しています。2002年度の初日の口頭発表は2月7日（金）に理学部で開催。発表時間一人10分。二日目のポスター発表は2月9日（日）に、新潟大学駅南キャンパス（CLLIC）で開催（写真）。朝11時から午後5時までに、学



科学生（大学院生を含む）が52名、他学部・他大学の学生が16名、父兄を含む外部の方が41名、合計109名の参加がありました。新しい形の公開発表に多くの方々のご出席を頂きうれしく思います。

**【学生・教員対話集会】** 2月14日に学生と教員の対話集会が開かれました。学生側から前もって寄せられた質問にそって討論が行われました。学生側からは、講義についての技術的問題、基礎科目の講義内容、環境問題の講義、教員間の連携についての要望がありました。教員側からは学科の理念とカリキュラム、講義の選び方、丸写しのようなレポートの問題、集中講義の履修率が低いなどの注文が出された。参加者数約70名、3時間以上にわたって熱心に討論されました。

## ■附属臨海実験所ニュース

臨海実験所では毎夏、新潟県内の高校生ならびに理科教育関係者を対象とした公開臨海実習、全国大学々部生対象の公開臨海実習、そして生物学科3年生と自然環境科学科3年生、それぞれ対象の臨海実習と計4つの臨海実習を行っています。昨夏の全国大学々部生向け実習については先に報告した通りです。県内高校生向けの実習は、新潟県立自然科学館と新潟市水族館「マリニピア日本海」の後援を受け、7/30-8/1の日程で20名（高校生11名と理科教育関係者9名）の参加者を得て行われました。生物学科の臨海実習は8/19-8/24の日程で受講者数は17名、自然環境科学科は8/26-8/30の期間で受講者数は16名でした。

なお、長年実験所に勤務されてこられた技能職員の中川曙生さんは、今年度をもって辞められます。



## ■新任教職員の紹介



山田 裕（物理学科）

2月1日より物理学科にお世話になることになりました。専門は俗に言う「にわか超伝導屋」で学生の時酸化物超伝導フィーバーが起こりドクター論文そっちのけで研究を続け気がついたら今でも飽きずにやっているといったしだいです。私自身は移り気なのか、名古屋大学を修了後、旧金属材料技術研究所-名古屋大学-島根大学とあちこちを転々としてきました。それぞれの場所で色々な経験をさせていただき、今度新潟大学はいかなるところか興味津々です。新潟は特にお米（お酒）がおいしいと聞き、大変期待しています。（ただし現在の健康のため禁酒中ではありますが??）。ただ生まれは富山でありながら生来の寒がりです。冬はちょっと心配しております。もっとも春は春で花粉を心配しているのですが…趣味は酒以外ではテニスです。機会がありましたら誘ってやってください。今後何かとお世話になるかと思いますがよろしく願いいたします。

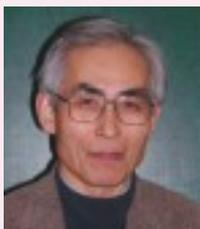
## 退官教職員の挨拶



### 転出に寄せて

数学科 明石 重男

新潟大学で教育研究に専念して、10年が経ちました。一つ残念だったことは、21世紀 COE プログラム情報通信部門に、工学部情報通信系9名の教員と共に「無線マルチホップネットワーク」という題目で申請した計画が不採択になったことです。この件に関しては、理学部教職員の皆様にお詫びしなければならないと思っておりました。申し訳ございませんでした。反対に嬉しかったことは、大学院自然科学研究科の助手の方と私の指導する学生の3人で作製したデータ処理プログラムが、新潟 TLO の御尽力により、財団法人ソフトウェア情報センターに著作権登録されたことです。これが、新大理学部発産学共同事業に発展してくれることを祈っております。大学の研究者は、現在「短時間で評価される研究」を生み出すことを文部科学省から要求されています。しかし基礎研究を冷遇することは、応用研究の先細りを意味することも事実です。理学本来の目的に向かって、教職員の皆様が御活躍されますことを心からお祈り致します。有難うございました。



### 定年退職にあたって

物理学科 宮野 和政

大学に職を得て以来40年を越えてしまいました。大学院も含めると20年間原子核実験を専攻し、のち素粒子実験に転向し現在まで24年あまり従事しました。その間超新星爆発に伴うニュートリノを史上はじめて観測したときの興奮は忘れることができません。それが定年直前に小柴東大名誉教授のノーベル物理学賞に結果したことは幸運なことでした。

ただ残念なことはカミオカンデの最初の目的である陽子崩壊の検証がいまだできないことです。陽子の寿命が長いことあるいは安定なことはある意味で安心できることです。宇宙が死んで再び生まれる機構がある方が私がもう一度何百億年か後に生まれる機会があるようで嬉しいのですが。三度目の転向の時期とも思われる時期の退職です。最早若さのエネルギーもなく不安がないわけではありません。これを機会に大学を卒業するつもりで、社会に飛び出したいと思っています。



### 広報紙のネーミング？

化学科 小俣 三郎

1971年理学部に赴任し32年の歳月が過ぎるなかで、沢山の教職員の方々にたいへんお世話になりました。この場をお借りして心から御礼申し上げます。

最大の出来事は博士課程を含む大学院への改革であり、それまでは修士課程まで進学した優秀な学生がよその博士課程へ進学するのを傍観するばかりでした。以後、大学院と基幹学部での教育研究も大きく活性化されてきました。

広報紙は、長谷川彰理学部長（当時）の御発案により、理学部後援会の御協力を得て1999年3月3日、大矢進編集長のもとに創刊号が発行されました。その前年の夏過ぎのこと、広報誌名について学部長の「諮問」を受けていろいろ考えた末、候補名10種（「理学部広報」、「理学部の教育研究活動」のような当たり前過ぎるものから…「FOSレポート」などまで）を順位なしで提出しました。長谷川先生はほとんどストレートに現在のものを選択して下さい、更に増田芳男先生に揮毫をお願いすることも決めていただきました。広報委員会委員を始めとする方々に較べれば、私の参与はナノレベル以下でしたが私個人にとっては記憶に残るものになりました。

今後のいっそうのご発展を祈ります。



### 退官に寄せて

事務長 川島 武義

昭和37年に新潟大学に採用されて以来41年間、事務職員の宿命である人事異動により、幾多の部局を経て、最後の勤務場所を理学部で迎えました。

理学部勤務は、会計係長時代（3年9ヶ月）及び事務長時代（2年）の2回計5年9ヶ月となります。

その間、教職員の皆様方から御指導・御鞭撻を得、多くのことを学び尊い経験をさせていただき、私にとってすばらしい公務員生活を送ることができました。

本当にお世話になりありがとうございました。

国立大学を取り巻く状況は、採用時と現在を比較し振り返りますと、想像もつかなかった変貌を遂げております。

現在、平成16年4月1日から「国立大学法人」への移行準備が進んでいますが、大学人の英知を結集し、すばらしい新潟大学となるようさらなるご発展を願うとともに、その中であって、理学部が一番星のごとく輝くことを心から祈念し、退官のあいさつといたします。

## 旭町展示館

新潟大学旭町学術資料展示室(通称「あさひまち展示館」)は、旭町キャンパスの脳研と医学部保健学科(旧医短)の間の一角に、一昨年の12月に開室しました。これは、理工系・歯学部系・人文科学系を通じた、本学の大きい知的財産である各種の取蔵資料の展示・発信の場として開設されたもので、大学博物館構想の先導的な役割を果たす場所でもあります。現在は、各部署代表からなる企画運営委員会と総務部研究協力課とで、実務的な運用を行っています。

当館では、常設展示として、「にいがた学のすすめ」という統一テーマのもと、新潟の地に根差した視点から、1階には理学部・災害研・工学部・人文科学部(心理系)そして歯学部の展示、2階には、教育人間科学部(芸術系)・人文科学部(考古・民俗・歴史系)・附属図書館の展示が、それぞれ展開されています。理学部・災害研の展示は、地質学と植物学関係の標本・資料が中心です。また、2階の企画展示室では、年3回の入れ替えで企画展を行っています。ちょうどこの2月～5月の期間、理学部の企画展として、地質科学科が中心になって「新潟県の地質と地下資源・防災」というテーマでパネル展示を行っています。

当展示館は、毎週火・木・土の3日間、午前10時から午後5時まで無料で解放されています。また館内では、本学テレビ公開講座などのビデオの視聴も可能です。ホームページは、全学のトップページから近日中にリンクされ公開

される予定です。旭町・古町方面にお出かけのついでに、あるいは学生実習の一環として、是非訪問されてみてください。



(旭町学術資料展示室・企画運営委員会委員 栗田裕司；地質科学科)

## 新潟駅南キャンパス2月1日オープン 愛称は「CLLIC」(クリック)

新潟大学の教育研究成果を地域の人達と共有するため、新潟駅南口「プラーカ3」地下1階にキャンパスを設置し、各種講座をスタートさせました。

理系からもすでに自然環境科学科の卒業研究発表や宮野和政氏によるニュートリノ研究の講演が行われました。3月には酒泉満氏と濱口哲氏によるめだかの性遺伝子発見の講演や、4月には積雪地域災害研究センターの高濱信行氏とト部厚志氏による公開講座「にいがた学のすすめ」が予定されています。



## インターンシップの実状

理学部にインターンシップが実施されて2年になります。大学での勉強内容と実社会における職業現場との関係を認識、理解してもらうことなどを目的に導入されたものです。全学科の3年次学生を対象に、夏期と春期の休業期間中に実施し、「インターンシップ特別実習a(1単位)、b(2単位)」として単位認定を行っています。

昨年度は33名、本年度は17名の学生が参加しました。実習を受けた学生の反応は良好で、受入先からも良い評価をもらっています。しかしまだ、希望者が全学科ではないのが現状です。インターンシップの意義を啓発していくことが必要かと思えます。

(寺澤達雄 インターンシップ委員長)

## これからの行事予定(平成15年度前半)

4月8日(火)	入学式
4月9日(水) 10日(木)	ガイダンス
4月11日(金)	授業開始
5月下旬から6月初旬	黎明祭
7月上旬	第3年次編入学試験
8月上旬	理学部説明会
8月11日(月)	夏季休業
から9月30日(火)	
9月下旬	秋季卒業式

## 編集後記

「理学部は今」は理学部後援会の援助で1999年3月3日に創刊号が発行されて以来、4年が経過しました。今期の広報委員会では、理学部の看板であるアカデミックな記事を、専門家でない普通の人達にも分かりやすく書いて貰うように3人の先生方をお願いしまして、タイトルページから3ページをそれに充てました。それらの原稿は新潟日報賞を受賞された酒泉満先生と濱口哲先生のメダカの性遺伝子発見のものと鉱物学会賞を受賞された赤井純治先生の鉱物学研究のものです。

父兄の方々をはじめ、多くの人達に理学部における研究の一端を紹介しました。とくに若い人が理学部に興味をもっていただければ幸いです。

広報委員：秋山茂樹(数)、小林迪助(物)、岡村睦雄(化)、杉本健吉(生)、志村俊昭(地)、石田昭男(自然)